

舞たうん誕生の舞台裏

～感動を伝えるツールとして～



近藤 誠
 (財)えひめ地域政策
 研究センター客員研究員
 (西条市)

「舞たうん」が、どうやら100号を迎える。20数年の積み重ねである。創刊に関わった者ではあるが、だからといって特別な感激がある訳でもない。「よくもまあ、続けてきたものだ」と思うのであ

る。私以降の研究者たちにご苦労様とねざらいの言葉を送りたい。
 現在の「(財)えひめ地域政策研究センター・まちづくり活動部門」の前身である「(財)愛媛県まちづくり総合センター(通称…まちセン)」が産声を上げたのが、昭和61(1986)年7月。最初の仕事は、暑い日差しが照りつける中、机の搬入等、事務所づくりだったと聞いている。

私がセンターに入ったのは、翌年の4月であった。その頃すでにセンターでは一冊の刊行物が出来上がっていた。その本は今でも続いている「イベントBO X」。実は、「舞たうん」の方が後なのだ。私が入った時点で、まちづくりネット



表紙が変わった舞たうん4号・22号

ワークのツールとして、センター独自の定期刊行物を出そうということには、すでに既定路線であった。センターがネットワークを高めていくためにも、センターとしての情報発信は必要だったのだ。ネットワークを結ぶためには、情報を収集しなければならぬ。情報を収集するためには、情報を発信する必要がある。それも、質の高い生の情報であればあるほど、その効果は高い。

研究員は、自分が足でかせいできた情報、出会った人たち等を誰かに伝えたくて、話したくて、うずうずしていた。当時のセンターは、お客が来ると研究員みんなが手を休め(宮本所長がその先頭ではあったが…)、応接ソファを取り囲

み、自分の仕入れてきた情報を一生懸命話していた。自分の感動を伝えたくて仕方がなかったのだ。だから、当初、センターという組織に対してネットワークが築かれたのではなく、研究員個々の熱い思いに対してネットワークが結ばれていったといっても過言ではない。

ところで、「舞たうん」の話。当時の研究員、宇都宮栄一氏を中心に刊行物出版の話は進められた。内容的なものは、それぞれ思いを寄せ集め、形としてはまとまったのだが、問題は、顔にあたるタイトルである。さすがにこれには、宮本所長も黙っていなかった。徹底的に「人」にこだわるのである。確かに、まちづくりを支えるのも「人」であれば、まちづくりの究極の資源もまた「人」である。

しかし、宇都宮氏と私は、「人」を大上段に振りかぶってしまうことに抵抗を感じた。そしてある日、「マイタウン」はどうだろう。「それなら、風起こしとか、風とおしのよいまち、風が舞い、人が舞う」という意味を込めてマイを漢字にしてタウンをひらがな、『舞たうん』がええな



舞たうん1号

あ」と二人で盛り上がったのである。これを、山本主任研究員、井口研究員、宮本（所長の息子ではない）研究員、そして臨時職員の都築さん、田村さんに話し、みんな「いいねえ」と了承してくれたのだ。がっ！こうして、外堀を埋めたにもかかわらず、宮本所長から「すつきりせんなあ」のお言葉。しばらくして所長から修正案として出されたのが「舞たうん人・人・人」。宇都宮氏と二人で、

「真珠湾攻撃じゃないのだから…」との理由でこの案を拒否。一方的に「舞たうん」で押し切ったのである。

でも、所長は、納得しなかったようである。そのことが、「えひめ地域づくり研究会議」の設立の日にはわかるのである。なんと、この日のメインテーマが「まちづくり人・人・人」だったのだ、啞然…。

その「舞たうん」が100号を迎える。それぞれの時代の研究員たちが、その時々熱い思いを載せ、まちづくり人に伝えてきたメッセージである。もし、「先輩たちが作ってきたのだから、その火を消すな」という思いで作っていると

ら、その日を境にやめてもらいたい。そして、自分たちが伝えたいものを作ればいい。それこそが、本当の「舞たうん」なのだから。



フルカラーになった舞たうん85号